

加藤周一 青春と戦争 『青春ノート』を読む

加藤周一 青春と戦争『青春ノート』を読む 目次

ある医学生の青春 まえがきにかえて 渡辺考 6

第一章 『青春ノート』とは何か

第一節 加藤周一文庫とは 二宮周平 14

第二節 『青春ノート』こそ加藤周一の原点である 鷺巢力 18

第三節 『青春ノート』から 24

第二章 『青春ノート』を語る

第一節 いまの若者は、『青春ノート』をどう読むか 渡辺考 42

半田侑子、猪原透、西澤忠志、風間健、秦桃香、安藤陽平、福井優、石運、金昇淵、
滝沢郁也、菊池まどか、関慎太郎

第二節 若き加藤の日々を見つめて 渡辺考 76

本村久子、山崎剛太郎、五味渕典嗣、西澤忠志、半田侑子、池澤夏樹

第三節 若き日の加藤周一と文学者たち 鷺巢力 127

第三章 『青春ノート』の時代と現代

第一節 戦争の時代を若者はどう見るのか 渡辺考 150

西澤忠志、半田侑子、猪原透、福井優、関慎太郎、滝沢郁也、石運、安藤陽平、

金昇淵、風間健

第二節 加藤周一と戦争の時代 鷺巢力 166

第三節 行動する加藤への思い 渡辺考 194

樋口陽一、上野千鶴子

第四節 『加藤周一 その青春と戦争』を撮り終えて 渡辺考 210

本村久子、福井優、石運、安藤陽平、滝沢郁也、池澤夏樹

【加藤周一略年譜】 鷺巢力 218

【加藤周一文献資料】 編集部 225

あとがき 一九六八年から半世紀の年に 塩田純 231

ある医学生青春 まえがきにかえて

渡辺考

開戦の日。東京帝国大学医学部に通う二二歳の青年は、綴った。

一九四一年十二月八日

K君が朝大学の裏門を潜った所で、無造作に話かける。《とうくやつたね》

T教授が授業のあとで、手術台に手をかけながら、《医学生の覚悟》を促す。《はぢまりましたね、かう云ふ緊張した所で勉強するのも男子の本懐ですか。やりませう》と、S助教授は胃癌を論じはぢめる。

医学者も医学生も興奮にあるなか、青年は冷静だった。だれもが明日すら見えない時代、科学者が対象物を見つめるような眼差しは、その後の彼が社会を見つめる際に一貫したものとなる。

戦後日本を牽引した思想家・評論家の加藤周一。彼が青年期につけていたノート八冊が歿後に見つか

った。加藤がこれらを綴ったのは、日本が日中戦争から太平洋戦争へと突き進んでいた時代である。

私がこのノートの存在を知ったのは、二〇一五年秋のことだ。この日、たまたまプロデューサーの塩田純とともに東大駒場のキャンパスを歩いていたのだが、そのとき、塩田が、旧制第一高校の講堂（現・教養学部九〇〇番教室）を見ながら、加藤がこの学校に通っていた時代のノートがあることを教えてくれたのである。加藤の歿後、すでに七年が経過しており、新資料があるなど思ってもいなかっただけに、私は興奮をおぼえた。

戦争の時代、青年加藤は何に悩み、何を考えていたのだろうか。そして戦争と時代をどのようにとらえていたのだろうか。

二〇一六年四月、私は京都へと向かった。加藤のノートをこの目で見るために。

立命館大学にある若き言葉

私を出迎えてくれたのは、立命館大学加藤周一文庫の鷺巢力わさづつとむさんである。出版社の平凡社に勤めていた鷺巢さんは、約四〇年にわたって加藤と交流した。加藤の遺族から寄贈された二万冊の蔵書や一万頁のぼる手稿などをもとにした加藤周一文庫で資料整理の陣頭指揮にあたっている。

新築してまもない立命館の総合図書館の地下に誘われた。厳重にロックされた貴重書庫。そこに八冊のノートは保管されているという。

存在はずっと知られていなかった。加藤が亡くなる四カ月前の二〇〇八年の夏、鷺巣さんが加藤を見舞ったのがきっかけだった。そのときに加藤は、ボソツといった。「書いたものが少しあるから、よろしく」

鷺巣さんはふりかえる。

「この頃、もう加藤さんは死を覚悟していました。でも、ノートのことは何もいわなかったんですね」

寄託された資料の数々は、二〇一一年にかつて加藤が教鞭をとった立命館大学に搬送された。資料整理にあたっていたスタッフが紙にくるまっていた資料を開けたところ、そこに八冊の大学ノートがあったというのだ。

「びっくりしました。まさかこんな貴重なものが出てくるということは予想していなかった。学生時代に書いたノートがあることは、妹さんや矢島さんさえ知らなかった」

「ちょっと待っててくださいね」。そういつて鷺巣さんは、担当の女性とともに書庫に消えていった。やけに長く感じられたが、実際は二、三分だったろう、鷺巣さんは金属製の箱を腕に抱えてきた。

フタを開くと、そこには一つひとついいねいに梱ばうされたノートが重ねてしまわれていた。鷺巣さんは、それらを養生シートが敷かれた机の上に並べた。スペシャルノートと書かれた、特注品のようなものも二冊ほどあったが、東横デパートと書かれたものもあり、多くが普通の市販のノートだった。

総ページ数はおよそ一〇〇〇頁、枚数は四百字換算で原稿用紙二〇〇〇枚ほどになるという。

加藤の生の言葉がそこにあると思っただけで、緊張が全身を覆った。冊子型の「青春時代のノート」は思ったほど古びていなかった。大きく深呼吸をし、手袋をはめた手で、慎重に、そして恐る恐る開いてみた。

飛び込んできたのは、瑞々しい言葉の数々だった。

若き日の内面

まず驚嘆させられたのは、短編小説から、詩、評論、翻訳に至るまで、加藤の興味がジャンルを超え、広範囲なことである。時代とも真摯に向き合い、学生である自らの役割も熟考し、重要な日、節目には、時事的な事象とともに自身の所感を含めた日記もつけていた。世界の動きをとらえながら、自身がどのような位置付けにあるのかを冷静に見つめていた。

文字は基本的に小さく、決して達筆とは言い難い丸っこい文字だが、丁寧に罫線に沿って書かれている。外国語にも通じていた加藤は、英語、仏語、独語などところどころに使っている。

女性の名前もメモされていた。思いを寄せた女性の名かと訝しんだが、かなりの数があるので不思議に思ったところ、自作小説の登場人物のものとする。いたずら描きのような女性の横顔もあった。当時ヨーロッパで人気を集めていた女優の顔を鉛筆でスケッチしたものだった。加藤は、映画好きの一面も持ち、第一高等学校時代には映画演劇研究会に所属していた。

それらは、若き加藤の思索の足跡でもあった。

私が振り返ったのは、私自身の学生時代である。途方もない喪失感とともに抱いたのは、赤面したくなるほどの羞恥心。ときはバブル全盛期、八〇年代後半から九〇年にかけての四年間、巷は熱病に冒されたようにうかれていた。私は、勉強など放擲^{ほうてき}して、夜の街に日々繰り出し、喧騒の中で熱狂に身を任せた。卒業時にも泡のような景気は続いており、どこかの企業も人手不足で学生の「売り手市場」。大学の成績などあまり考慮されることもなく、所属大学と学部の名前^{ネーム}で内定が濫発されていた。私自身、未来設計などほとんど描くことなく企業面談をし、いくつかの社から内定を貰った。つまり、世の中をなめていたし、世界の中で自分がどのような位置にいるかなど、考えすらしなかった。社会を見つめる眼力など備えていなかった。

若き日々を恥じながら、ふと思いついた。番組取材という形を借りて、加藤の青年時代のノートを読むことができれば、齢五〇を迎えようとする自分自身が、若き日々にたどるべきだった思索旅行を「遅ればせながら」することができると。そして、何よりも、戦争の時代を生きた青年が悩み抜いた深慮は、混沌とした状況下にある現代に大きな示唆となるに違いないと確信していた。

そのような思いから、残された八冊のノートを加藤の関係者の証言を交えながら読み込むというドキュメンタリー番組を、E TV特集という枠に提案し、採択された。

私は鷲巣さんと加藤周一文庫スタッフの方々の協力のもと、加藤のノートを読み込んでいった。九六歳になる加藤の妹の久子さんを筆頭に関係者への取材を行なった。さらに父の代から加藤と深い交流を

持つ作家池澤夏樹さん、九条の擁護で加藤と考えを同じくしていた憲法学者の樋口陽一さん、学生時代からの友人で御年九八の詩人山崎剛太郎さん、それに加藤文庫で整理作業に従う若いスタッフに話を聴いた。さらに立命館大学に通う九人の若者たちに、自分たちと同じ年頃に加藤が書いた言葉を精読してもらい、共に語った。他人事ではなく、自分たちの問題として加藤の言葉を捉えていく姿には打たれるものがあつた。

番組は二〇一六年八月十三日に「加藤周一 その青春と戦争」というタイトルで放送され、多くの反響を得た。

本書では、番組作りを通して見えてきた加藤の青春像を描いていく。同時に番組では構成しきれなかった貴重な加藤の言葉や、久子さん、池澤さん、樋口さん、山崎さん、加藤文庫のスタッフたち、九人の若者たちの言葉も編んでいく。

若き加藤の思考の軌跡をたどりながら、彼がいた「戦争の時代」を問いなおしていきたい。

第一章 『青春ノート』とは何か

第二節 加藤周一文庫とは

二宮周平（前立命館大学図書館長）

文庫創設の経緯

加藤周一氏は二〇〇八年二月五日逝去した。自宅には、蔵書を始め膨大な資料が残された。最期を共にされた矢島翠氏のご意思は、これらの資料を一括して図書館に寄贈し、市民の方たちが利用できるようにすること、と同時に加藤周一という人間とその思想の形成過程を公的に保存することにあった。

加藤氏は、一九八七年四月、立命館大学国際関係学部創立にあたり、客員教授として参画され、本学の信頼性と社会的評価を高められた。それほど大きな存在だった。続けて、日本の戦争加害の視点と現代社会の平和問題を同時に展示し、時機に応じて特集や講演会等を開催する立命館大学国際平和ミュージアムの初代館長も務められた。加藤氏は、二〇〇四年、平和憲法を擁護する「九条の会」の呼びかけ人の一人となり、京都においても、市民の方たちとの交流を楽しまれた。

加藤氏と立命館大学、京都にはこうしたゆかりがあったことから、編集者として彼が最も信頼されていた鷺巣力氏が、当時の立命館大学図書館長、吉田美喜夫（現立命館大学総長）に連絡をとり、本学図書館がご寄贈を受けることになった。常任理事会による正式な承認は二〇一〇年九月である。以下で紹介する諸資料の整理およびデジタルアーカイヴ化については、鷺巣氏のご指導を仰いでいる。

文庫の内容

加藤氏の残した書籍・雑誌類は二万点を超えるが、そのうち約一万二千点は、加藤文庫の開架式閲覧室に配架され、自由に閲覧し、原則として貸出を受けることができる。約八千点は、閉架式書庫に収蔵され、一定の条件が課せられるものの閲覧が可能となるものもある。開架式に配架される蔵書は、三つに分けられる。第一群は、彼が所蔵し、利用した参考書籍・雑誌類である。これらは十進分類法に従って配架される。第二群は、彼の著書と彼の著作が掲載された雑誌である。彼が推薦文を寄せた全集の「内容見本」も、そのほとんどを揃える。著者の全体像を把握し、的確に描写することを好んだ彼の真骨頂が表れるものである。第三群は、彼について書かれた書籍・雑誌である。第二群と第三群は、刊行年代順に配架される。これらは現在も補充中であり、彼の蔵書とは区別される。また寄贈を受けた書籍・雑誌類は、書誌データにその旨記載している。

本文庫には、「手稿ノート」、来信書簡、写真、手帳、新聞切り抜き、地図などの資料類が収められて

いる。「手稿ノート」は、少数の冊子型ノートと多数のルーズリーフ型ノートに分けられるが、総頁数は一万頁を超える。ルーズリーフ型ノートの大半は、彼自身によって主題別にファイリングされていた。ファイリング総数は一千を越す。これらの「手稿ノート」は、主として執筆準備のために取られたものであり、彼の著作や思想を詳しく分析するための重要な資料となるものだが、漢語、英語、独語、仏語、ラテン語などが使用されており、判読には相当の力量を要する。現在、加藤周一現代思想研究センターおよび立命館大学図書館を中心に整理が進められており、作業が完了した段階で、『デジタルアーカイヴ化し、図書館ホームページを経由して公開される。第一弾が、二〇一六年四月、八冊の『青春ノート』、第二弾、二〇一七年八月、二冊の『Journal Intime』(日記)、第三弾、二〇一八年六月、『狂雲集註』、『Notes on Arts』、『1968 1969』、『詩作ノート』、第四弾、同年一月、『日本文学史 古代』、『日本文学史 平安』が公開された。

文庫の意義

今日の図書館には、所蔵する諸資料を情報として社会に発信する役割がある。国際的知識人、加藤周一の思想形成過程を文庫を用いてデジタル・アーカイヴ化することは、その重要な一つである。本学卒業生のご遺族(配偶者)のご寄贈により建設、開館した平井嘉一郎記念図書館二階にある加藤周一文庫の入口には、著書『日本文化における時間と空間』(岩波書店、二〇〇七年)の冒頭部分に関する手稿が

拡大掲示されている。

日本の諺言に「過去は水に流す」という、過ぎ去った争いは早く忘れ、過ちはいつまでも追求しない。その方が個人の、または集団の、今日の活動に有利である、という意味である。しかしその事の他面は、個人も集団も過去の行為の責任をとる必要がない、ということの意味する。

本学で学ぶ学生・院生、教職員、来館される市民の方たちへの彼のメッセージでもあり、これも文庫の意義の一つだと思う。

渡辺 考（わたなべ・こう）

1966年東京都生まれ。早稲田大学卒。NHK ディレクター。NHK スペシャル『学徒兵 許されざる帰還 陸軍特攻隊の悲劇』『戦場で書く〜火野葦平と従軍作家たち』重松清との『最後の言葉』『自らの言葉で立つ〜思想家・吉本隆明』（NHK・戦後史証言プロジェクト）などすぐれた番組づくりを行い、ギャラクシー賞、橋田賞など受賞多数、さらにそのいくつかを書籍化している。近著『ゲンバクとよばれた少年』（講談社）は平和協同ジャーナリスト基金奨励賞に選ばれた。他に『インパール作戦従軍記—葦平「従軍手帖」全文翻刻』（集英社）

鷺巣 力（わしず・つとむ）

1944年東京都生まれ。評論家。立命館大学客員教授、同大学加藤周一現代思想研究センター長。東京大学法学部卒業後、平凡社で加藤周一作品や雑誌『太陽』の編集長を務め、取締役で退社。著書『コロンブスの卵たち—「常識」に挑戦するイトーヨーカ堂グループ』『自動販売機の文化史』『宅配便130年戦争』『公共空間としてのコンビニ 進化するシステム24時間365日』『加藤周一を読む—「理」の人にして「情」の人』『加藤周一—という生き方』。共編著『女将一代記 中将夫人かく戦えり』『加藤周一—セレクション』『加藤周一—が書いた加藤周一—91の「あとがき」と11の「まえがき』『加藤周一—自選集』加藤周一『「羊の歌」余聞』。近著『加藤周一—はいかにして「加藤周一—」となったか—『羊の歌』を読みなおす』（岩波書店）

加藤周一 青春と戦争『青春ノート』を読む

2018年12月10日 初版第1刷印刷

2018年12月20日 初版第1刷発行

編著者 渡辺 考・鷺巣 力

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1748-4 © Ko Watanabe, Tsutomu Washizu 2018, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。